

# 沖縄島におけるリュウキュウアユの復元

リュウキュウアユを蘇生させる会 代表 池原 貞雄

## はじめに

本会設立の目標は、「リュウキュウアユを象徴的にとらえ、アユをはじめ他の河川生物および生息環境の保全や創生活動等を行うことを目的とし、保護か開発かという対立的な図を極力さげ、生物本位に諸活動を行う」ことである。この理念に基づき、一般市民をはじめ産官学一丸となってリュウキュウアユを沖縄島に蘇生させるための活動を行っております。リュウキュウアユの住める河川は、他の水生生物たちにとっても住みやすい環境となります。

## リュウキュウアユとは？

アユは日本の代表的な淡水魚で、本土においては水産資源としても重要な位置を占めております。アユは、秋（リュウキュウアユにおいては秋から冬）にかけて汽水域より上部の浅瀬に産卵し、孵化後川から海に下り、春先に再度河川に戻り、中流から上流の生育場へと遡上していく、川と海を行き来する両側回遊魚であります。

琉球列島のアユは、日本列島や朝鮮のものとは遺伝的に大きく異なるため、1988年に固有亜種としてリュウキュウアユと名付けられました。本亜種

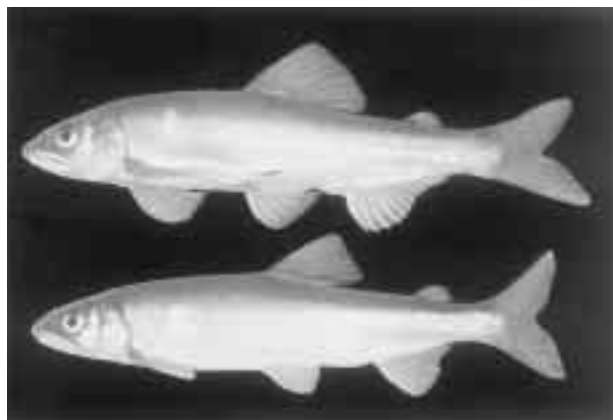


写真1 リュウキュウアユの雄(上)と雌(下)

は、琉球列島の生い立ちを解明するための重要な手がかりを私達に与えてくれます。しかし、新亜種リュウキュウアユと命名されたにもかかわらず、その年の10年前に採取されたものを最後に、沖縄島からその姿を消してしまいました。戦前は沖縄産のアユを本土に出荷しようとした計画があったほどに、やんばるの河川に数多くのリュウキュウアユが生息しておりました。それが絶滅してしまった原因としては、本土復帰にともなう急速な開発にあると思われます。沖縄島の河川は本土の河川にくらべ遙かにその流程が短く河川水量も少ないことも、開発等による悪影響を受けやすかったと考えられます。

アユ類は基本的には1年魚であるため、一度でも産卵発生ができないような状況に陥りますと、壊滅的なダメージを被ってしまう可能性があります。

## 沖縄島にリュウキュウアユを蘇生させるための活動

### 1) 蘇生活動のはじまり

リュウキュウアユへの本格的な取り組みは、1990年に奄美大島で開催されたフォーラムを皮切りに、翌年には沖縄県名護市にて「リュウキュウアユ・フォーラムinなご」が開催され、この時に「リュウキュウアユを蘇生させる会」が設立されました。沖縄島から姿を消してしまったリュウキュウアユをもう一度やんばるの河川に蘇生させるために、高知大学で飼育されていた稚魚を譲り受けて、種苗生産の第一歩が始まりました。翌年には和歌山県の水産試験場で飼育されていた稚魚を譲り受け、一部を種の保存を目的とした陸封化のため福地ダムへ放流され、残りは源河集落にある「リュウキュウアユ種苗センター」にて飼育し、放流用種苗の生産を開始しました。いくつかの失敗を繰り返しながら現在も種苗の生産を続けています。

## 沖縄島におけるリュウキュウアユの復元

リュウキュウアユを蘇生させる会 代表 池原 貞雄



写真2 リュウキュウアユ種苗センター



写真3 機関誌「清流」と啓蒙書の「琉球の清流」

「リュウキュウアユ種苗センター」は、当会と「源河川にアユを呼び戻す会」、名護市、北部ダム事務所の呼びかけにより集められた資金で建設された施設です。

## 2) 活動の中心機関「清流」の発行

当会の活動の中心は、一般市民を含めた関係者に対する啓蒙活動にあります。年2回の機関誌「清流」の発行を通して、リュウキュウアユの情報や河川生物の紹介、河川状況等を紹介しております。この機関誌は会員227名（2001年4月現在）の他、国・県・地方の諸団体135に配布しております。定期的な機関誌の発行は、継続的な蘇生活動に非常に重要であります。

近々この「清流」の原稿を中心とした新たな啓蒙書の出版を計画中です。

## 3) リュウキュウアユ復元に向けての拡大会議

当会がリュウキュウアユ復元に向けての拡大会議の呼びかけ人となり、毎年1回国・県・名護市・コンサルタント会社・市民団体等にご出席いただき、このアユの蘇生に向けての取り組みの検討や情報交換を行っております。産官学が一同に会して話し合うことは、情報交換の意味でも大きな成果を



写真4 リュウキュウアユ復元に向けての拡大会議

あげております。特に官庁関係の方々には、どうしても縦割りの行政になりやすく、1部局にリュウキュウアユの産卵時期での河川改修工事の中止をお願いしても、他の部局が工事等により河川に土砂を流し、産卵場をだめにしてしまうことがよく起きました。関係者が一同に会することにより、このような弊害は少なくなりつつあります。河川改修工事は洪水対策等住民の生活にとって大切なことであり、一切の工事を中止することは不可能です。しかし、同じ工事をするにしても、時期を選びなるべく河川に負担のかからない工法を採用することにより、河川や河川生物に対する悪影響を軽減することが可能なのです。

#### 4) 河川へのリュウキュウユの放流および河川観察会

河川環境を改善するには、まず第一に河川について関心を持ち、現状を知ってもらう必要があります。理解なくして、河川環境の改善に向けての取り組みが進展することはありません。そのためにも、リュウキュウアユの放流は欠かせない活動の一つとなっております。リュウキュウアユ種苗センターにおいて生産された稚魚の放流は、ほぼ毎年5月から6月にかけて実施しております。1995 - 96年には試験的に名護市の源河川以外のやんばるの3河川でも放流を試みました。この放流は、源河川に比べ河川環境が改善されていないため、良好な結果をえてはおりませんが、放流を通しての意識改革には大きな成果をあげていると考えております。平成12年6月の源河川での稚魚の放流では、稚アユたちがどのような河川環境下にあるかを広く知ってもらうために、同河川において河川見学会を実施しました。また、同年12月には放流した稚アユたちが、どのように成長しているか、産卵はしているか等を観察するために、再度同河川において観察会を実施しました。大きく育ったリュウキュウアユを投網で採捕し、参加者の方々にじかに見てもらいました。私たちの活動がどのように実を結んでいるかを、肌で感じることで感動を覚えた方々も少なくなかったと思います。



写真5 源河川でのリュウキュウアユの稚魚放流式

#### なぜダム湖への陸封化が必要なのか

リュウキュウアユをやんばるの河川に蘇生させるのに、なぜダム湖に陸封化する必要があるのか。その答えは、人が行う活動には大きな波があるからです。沖縄においても一時期「リュウキュウアユブーム」というほどに、新聞・テレビをにぎあわせていた時期がありました。しかし、リュウキュウアユを蘇生させる活動は、一時のブームで完了するほど簡単なものではありません。たとえやんばるの河川にリュウキュウアユが戻ってきたとしても、ちょっと目を離すとすぐにまたいなくなってしまうでしょう。残念ながら、人の関与なしに、保全・保護は成り立たないのが現状です。現在はまだ河川においては放流なしに、リュウキュウアユの姿を見ることは未だできておりません。



写真6 福地ダム流入河川のサンヌマタ川

## 沖縄島におけるリュウキュウアユの復元

リュウキュウアユを蘇生させる会 代表 池原 貞雄

リュウキュウアユ種苗センターは、予算的にも厳しい状態が続いており大きなアクシデントがあった場合、種苗の生産ができなくなってしまう可能性もあります。このような危険性を回避するためには、やんばるのダム湖への陸封化が必要となるのです。また、本種の陸封化は種の保存にも重要な意味があります。天然で唯一このアユが生息している奄美大島は、年々生息環境が悪化したり捕りすぎたりして、絶滅が危惧されているので、危険分散の意味でも重要です。

ダムは沖縄県民へ飲み水を提供するため、水質の保全、ダムへの流入河川の実環境整備等が継続的になされており、リュウキュウアユにとって安定的に再生産が可能な場所です。このため、当会の設立当時からリュウキュウアユを北部4ダム（福地ダム、安波ダム、普久ダム、辺野喜ダム）への陸封化を行ってきました。沖縄総合事務局北部ダム事務所はダム事業の実環境保全対策の一環として、積極的に放流や追跡調査等を継続して行っております。この間、異常出水や濁水等がありましたが、リュウキュウアユたちはそのような状況乗り越え、現在もダムでの再生産を続けております。ダムへの陸封化はほぼ成功と考えております。

## | おわりに

私たちの活動は、ダム湖への陸封化の成功、河川環境の好転、種苗生産の確立等かなりの成果をあげております。今後は、これまでの成果をふまえ、やんばるの河川にリュウキュウアユが完全に戻れるような、河川環境の整備に向けての地道な活動を続ける必要があります。このような状況下で「日本水大賞・奨励賞」をいただいたことは、「気を抜かずにがんばれ」というエールとして、大変ありがたく思っております。会員一同持続的活動へさらなる意欲が湧いてまいりました。